



# 井の頭自然文化園の生き物たち

井の頭

吉祥寺

24号  
2015年9・10月号

2015年(平成27年)9月1日

●編集・発行  
いのきちさん編集委員会  
編集長 川井信良  
東京都三鷹市上連雀 1-12-17  
株式会社文伸 発行  
電話 0422-60-2211  
FAX 0422-60-2200  
メール inokichi@bun-shin.co.jp

●協力  
東京都西部公園緑地事務所  
東京都井の頭自然文化園  
井の頭恩賜公園100周年実行委員会  
NPO法人みたか都市観光協会  
一般社団法人武蔵野市観光機構

●制作支援  
株式会社文伸 / ふんしん出版

井の頭恩賜公園  
開園100周年まで  
あと1年8ヶ月

絵せのうさここ 文瀬能けい子

進捗報告 カイツブリのツッ助の巻 その1  
月夜の井の頭池で、カイツブリのツッ助はひとりぼっちで眠っていました。パシヤ、パシヤリと言う音にびっくりして目を覚まし「怖いよー、誰か助けてー」と叫びましたが、もう親は助けたりしません。「大丈夫、お前を食べたりしないよ。」と黒い影が言いました。まるで大きな犬のように、目が光って見えました。

せのうさここ 1975年 盛岡市で生まれる。小6で三鷹へ転校。アニメ動画から絵本に進む。三鷹市在住。瀬能けい子さんは母親。

INFORMATION 2015年9月~10月

- 井の頭恩賜公園**
- 【ネイチャー☆プログラム】 次世代を担う子供たちや公園を訪れる人たちに、わかりやすく楽しく「自然の仕組み」を学び遊んでもらうプログラムです。
- あおぞら実験室(井の頭池付近) 9月6日(日)
  - グリーンバード(井の頭池付近) 9月13日(日)、9月27日(日)
  - どんぐり広場(御殿山広場) 9月3日(木)
  - ツリー☆マジック(第二公園) 9月5日(土)
  - ツリートレック(第二公園) 9月13日(日)
- 詳しくはホームページをご覧ください。 <http://www.i-np.jp/index.html> に載せます。
- 野外劇フェスタ(風煉ダンス「泥リア」)(文化交流広場) 9月19日(土)~28日(月)
  - 三鷹国際交流フェスティバル(文化交流広場・野球場とその周辺) 10月4日(日)
  - 吉祥寺アニメワンダーランド(野外ステージ) 10月10日(土)、11日(日)
  - 井の頭100祭(野外ステージ) 10月17日(土)、18日(日)
  - 三鷹の森フェスティバル(文化交流広場) 10月18日(日)

- 井の頭かんさつ会**
- 第125回「野鳥観察」9月26日(土) 時間未定
  - 第126回「(未定)」日時未定
- 事前申し込みが必要です。詳細や申し込み方法はHP <http://www.kansatsukai.net/> に載せます。

1級遊遊安浩のいのけん受験講座答え合わせ

Q1 ① 家光 ② 鷹狩り  
Q2 ① 井の頭かんさつ会 ② 井の頭かいり隊  
Q3 ① 1942または昭和17 ② 5 ③ 17

**募集**

**井の頭公園の古い写真を集めています**

◀昭和25年頃の井の頭池写真提供：鈴木育男氏

2017年の井の頭恩賜公園開園100周年を記念して、井の頭公園の今昔を伝える写真集を刊行する予定です。井の頭公園の古い写真をお持ちの方で、写真集に掲載しても良い方はご一報願います。なお、お借りした写真は、スキャン後、速やかにご返却いたします。また、謝礼として、完成した写真集を謹呈いたします。

お問い合わせ ぶんしん出版 ☎0422-60-2211 (担当：宮川) 〒181-0012 東京都三鷹市上連雀 1-12-17

## 井の頭自然文化園の動物たちと飼育員 その5



夢中でえさをかじっていると思えば、追いかけてこするように駆け抜ける。そんなニホンリスの素のままの姿が見られる「リスの小径」は、井の頭自然文化園の人気スポットです。いつもは活発なリスたちも、夏の盛りは様子が違います。枝に抱きついて、とすると落ちかかったり、地べたにうつぶせになったり。「暑い時期はだらっとして、いつも以上に「まぬげ感」があります」と飼育員の高松美香子さん。

えさを隠すという習性でも、ときおり「まぬげ感」が現れるのだとか。「隠したえさを他のリスに盗られることもあるんです。ふかし芋をえさにしたときは、隠そうとして巣箱の隙間に塗り付けてしまっ。土壁を塗る左官屋さんになったのかと思いました」と大笑い。

ニホンリスは本州や四国に生息し、武蔵野でも数十年前までは見られました。シマリスのようなほお袋を持たず、すっきりした顔立ちです。繁殖期は1月から8月と長く、1年に2回出産するメスもいます。大好物はもちろんクルミ。でも意外と雑食で、野菜やドッグフードも食べます。子育て中のお母さんは、煮干しや殻付きゆで卵をせせと食べて、カルシウムを補給。成長期の子どもたちは、動物性たんぱく質を好んで食べます。

小田原 滯 (おだわら みお) 編集者・ライター。フィールドは多摩。三鷹市在住。

**24 今月のはな子**

**東洋医学の知恵?**

今年も厳しい夏がやってきました。単なる気のせいなのか、地球温暖化の影響なのか、年々、暑さが厳しくなっているように感じます。私たちでも、夏の暑いときには食欲が落ち、冷たいそうめんなどを食べたくなりますが、ゾウのはな子も、この季節になると食べ物の好みが変わってきます。

この夏は7月2日からは季節物のスイカとナスを与えているのですが、その後、今まで残さず食べていたモモの缶詰を7月中旬から残すようになり、8月からはリンゴも食べなくなりました。8月中旬からはナスよりもスイカを好むようになり、毎日3玉も食べています。

東洋医学では、モモは体を温める作用があり、リンゴはどちらでもなく、スイカやナスは体を冷やす作用があるといわれていますので、暑さが厳しくなるにつれて、体を冷やす作用があり、ナスよりおいしいスイカをたくさん食べるようになったのかもしれない。

(井の頭自然文化園 副園長 堀秀正)

その24 **カラス**

井の頭公園の生き物たち

井の頭かんさつ会 田中 利秋 (たなか としあき) 井の頭かんさつ会代表。毎月自然観察会を開催。池の外來魚問題にも取り組む。



**2種のカラスと、人間が変えた暮らし**

井の頭公園には2種類のカラスがいます。「ハシボソガラス」と「ハシボソガラス」です。ハシボソはその名の通りくちばしが太く、カーカーと澄んだ声で鳴きます。ハシボソはくちばしが細く、やや小柄で、お辞儀をしながらガーガーと濁った声で鳴きます。じつは10年ほど前まではハシボソばかりで、数も今よりはるかに多数でした。元々は森林に住んでいた彼らは樹林のある公園を好み、そこをねぐらや営巣場所にして、市街地や住宅地へ餌を探りに通っていたのです。大量の生ゴミが路上に無防備に出されていた時代です。井の頭公園でも、

**24 窮乏ふたたび**

カイツブリの卵は約3週間で孵りますが、前号に書いた「上流ペア」の早すぎる卵は結局孵りませんでした。しかしペアはその産卵の10日ほど後に2個の卵を産み足してあり、それが孵りました。他の2カップルも3羽と1羽のヒナを誕生させたので、7月中旬の井の頭池は再び賑やかになりました。ところが、7月の終わりごろからカイツブリの数が減り始めます。おそらく大量のブルーギルのせいですが、モツゴなどの稚魚がほとんど現れなかったため、餌不足に陥ったのです。親鳥たちは岸辺の草や岩にいる虫を探して子供に与えていましたが、自分の分を確保するのさえ難しく、子供たちに早すぎる独り立ちを促し、多くが池を去りました。まだ飛べない小さな幼鳥たちはやはり虫を探して命をつないでいましたが、親の庇護なしに生き残れる可能性はわずかです。

8月半ば、井の頭池で見かけるカイツブリは2羽か3羽に減りました。次のかいはばりに期待するしかなさそうです。

井の頭かんさつ会 田中 利秋 <http://homepage2.nifty.com/tnt-lab/>

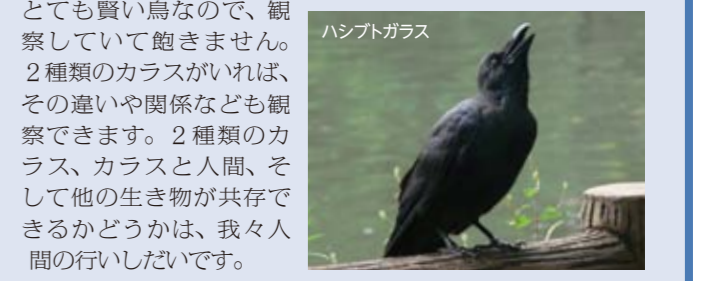


子供を追い払う親鳥

ゴミ箱から溢れた弁当の残りや、来園者がコイやカモに投げるエサを得ることができました。自然の餌ももちろん食べるので、増えすぎたハシボソガラスは他の生き物の大きな脅威でした。例えばカルガモは、ヒナが毎日1羽のペースで減っていたのです。

2010年ごろから、早朝にハシボソガラスの姿を見かけるようになりました。開けた場所を好む彼らは鉄道の沿線や川沿いの広場などにいたのですが、しだいに行動域を広げ、ついに井の頭公園まで進出したのです。今では池の周りや西園を中心に、毎日姿を見ることが出来ます。ハシボソが進出できたのは、競合するハシボソが減ったからです。生ゴミの出し方が改善され、公園は2003年4月でゴミ箱を廃止、2007年3月にはエサやり自粛運動を始めました。得られる餌が激減したため、ハシボソガラスはやがてそれに見合う数に落ち着いたのです。

カラスの減少はその被害に頭を痛めていた人間にだけでなく、他の生き物にもプラスになりました。カルガモのヒナは減り方がゆるやかになり、無事育つものも現れました。カラスはとても賢い鳥なので、観察していて飽きません。2種類のカラスがいれば、その違いや関係なども観察できます。2種類のカラス、カラスと人間、そして他の生き物が共存できるかどうかは、我々人間の行い次第です。



ハシボソガラス

**24 カイツブリ通言**

「楽しい水に泳がせたい!」

カイツブリは、得意の潜水で小魚やエビを捕まえる。小さな水鳥です。池や川にカップルで縄張りを作って暮らし、子育てをします。